

私達の教育改革通信

第 8 2 号 2 0 0 5 / 6

教育通信ホームページ:

<http://cert.kyokyo-u.ac.jp/oka-index.html>

<http://homepage2.nifty.com/jiyudaigaku/>

先事館制作室: 進士多佳子、〒106-0032 港区六本木7-3-8 ヒルプラザ910

発行人: 西村秀美、先事館箕面 〒562-0023 箕面市粟生間谷西 3-15-12

お願い:「教育通信」はオープンメディアに移行しつつあります。これまでの方法に加えて、新たに入会される方A(購読)会員(実費1号100円、年会費1200円)運営に参加されるB(協力)会員およびC(編集)会員になって下さる方を歓迎します。B会員には自己負担でコピーと友人への配布、C会員にはそれに加えて編集を輪番でお願いします。私たちの教育改革通信が、今後どう発展するか、この新方式が有効に機能することが望まれます。

編集:先事館吉祥寺: 海野和三郎 〒180-0003 武蔵野吉祥寺南 4-15-1

先事館狭山: 菅野礼司 〒589-0022 大阪狭山市西山台 1-24-5;

先事館近大理工総研: 湯浅学、川東龍夫

〒577-8502 東大阪市小若江3-4-1

先事館京都教育大教育セン岡本正志 〒612-8582 京都伏見区深草 1

死に至る日本の教育

関本 肇

1944年夏の初め、八幡製鉄所の中の学徒勤労動員宿舎で、旧制五高三年のわれわれに、七帝大(東大、京大、東北大、九州大、名古屋大、北海道大、台北大)各学部、学科一覧表が示され、五高卒業後の大学校名と専攻志願を各自が選んで印を付けるようにとの事であった。皆でワイワイ言いながら東大経済、京大法科など適当に決めるのである。大学入試などというものは無い。印即入学だ。わたしは、京大、文学部哲学科、美学美術史専攻と印した。わたしはこの年の初めから専攻について悩んでいた。昭和19年、黒雲の中にいるような世情である。将来の見通しなど見えるはずもなく、とても自分の専攻など決められないわたしの青春は暗闇の中で開いたと言うべきだろう。1931年(昭和6年)満州事変、「非常時」の呼び声の中で日本は15年戦争の泥沼に踏み込み、1937年(昭和12年)日中戦争と軍部の独裁が進む中、1941年(昭和16年)わたしが旧制中学5年の冬に太平洋戦争に突入。厳しい旧制高校受験勉強の中で、自分の位置づけに戸惑いながらも、敷かれた道を進むしかない。1942年(昭和17年)わたしが熊本の旧制第五高等学校に入学のころには、すでに日本軍は各地の戦場で敗れ、敗色は濃く、「一億玉砕」のスローガンは、若者の耳には、まもなく戦場に出て、そこで無意味に死なねばならぬと響いていた。だが五高入学は、今までの押し付けられた小、中学校の教育路線を一挙に打ち破り、自主・自立の五高生として、世間に流通する価値観を無視し、軍部の横暴を思う存分こき下ろし、天皇制下の全体主義のナンセンスを腹の底から批判し罵倒することのできる学生生活が保障されることになった。これがかりそめのパラダイスであることは分かっている、弊衣破帽、厚歯の下駄に黒いマント、朝と無く夜と無く、町に野に寮歌を放歌、高吟するという、束の間の自由をこのひと時にこめて謳歌すれば、その背後から

やがて戦場で死ぬと言う、ドス黒い運命がまたしても顔をもたげてくる。学校は全寮の自治制度である。従来の価値を否定したからには、自ら立たねばならぬ。訳の分からぬままに精一杯背伸びして、文学を論じ、哲学書に読みふけり、徹夜で議論し、運動部では体力の限界に挑戦し、それでも足りず街に出ては寮歌を歌い乱舞する。学校は徹底して学生を守った。講義をサボって昼日中に映画館で映画を見てみると、突然、臨検と称する警察官の立ち入り検査がある。交番につれていかれポケット検査をされるとタバコが出てくる。二泊三日の拘留だと脅かされる。しかし案じることは無い。やがて生徒部長の先生が来て、もらい下げてください。解放された学生たちはポケットマネーを出し合い一升瓶をぶら下げて先生のもとにお礼に行く。これが当時の旧制高校の伝統だったかも知れぬが、それはまた明日死ぬ若者たちへの学校の思いやりであったかもしれぬ。良き師、良き友に囲まれて、未熟な若者が自由と自立とを獲得していくこの貴重な時代を、今でもわたしは大切だと思っているし、教育の原点はここにあると感じている。ずっと後になってわたしが30年余りも学生運動に関わったのはこうした契機によるといえる。

話しが逸れたが、大学の進路専攻の問題であった。決めかねていたわたしに、母親が天野さんに聞いたらどうかと言う。昔、天野さんが母の里で学生時代を過ごされたことは聞いていたが、先生は京大定年で今年から甲南高校の校長で住吉に住んでおられるとのこと。電話したらお出でなさいと言われたので、早速、その夜にお尋ねした。灯火管制の時代である。我が家は芦屋にあったが住吉で電車を降りて電話したらわざわざ駅までお出でくださった。暗闇の中とはいえ先生は着物姿である。これは非国民の着衣で当時としては考えられない服装だ。とにかく招じ入れられ、書物がぎっしりと並んでいる書齋で、わたしが哲学をやりたい、美学に関心があると申し上げたら先生は予期しない喜びかたで、次から次へと色

々お話をさる。美学には研究室があるので学生が助手や副手といつでも話し合えるから良いんだ、と言われる。親友の九鬼周造のことを熱っぽく話され、彼はドイツ留学でハイデッガーについたが、感覚的、経験的にしか分からない日本の「いき」をハイデッガーと論じた。彼は九鬼によって日本を知ることになったのだ、と楽しそうに話されたのが印象に残っている。そのときには分からなかったが、カントの実践理性批判の翻訳者としての天野さんの関心は哲学者として深いものであったと思う。その時に著者の署名入りの『『いき』の構造』をくださり、また先生に九鬼周造からもらったと言う「小さい花のテレジア」を頂いた感動は忘れる事ができない。この時、天野先生が、ぜひ美学をやりなさいと励まされた言葉の中には、「時代の流れに抗してでも」と言う響きを感じた。

わたしは当時行われていた「海軍予備学生」や「陸軍特甲幹」と称する学生に対する特別措置として設けられた六ヶ月で将校に任官するという特典をすべて否定して、いわゆる赤紙を待って徴兵される道を選んだ。徴兵で軍隊に入る前にすべての蔵書は倉に入れた。京大入学は1944年(昭和19年)であるが徴兵されたのは次の年であった。復員して帰郷したときに、倉は空襲で直撃弾を受けて全焼したと聞いた。焼け跡を訪ねたとき、書物は外側から燃えても真ん中の部分の「シン」だけが燃え残ることを発見した。手で開くと活字部分が読めるのである。天野先生から頂いた二冊を見つけることはできなかったが、蔵書を焼いた心残りは戦後数年続いた。

復員復学以後の自分史を書くつもりは無いが、わたしが日本の教育に関心を持つようになったのは天野先生への関心から、戦後の先生の足跡を追うことから始まったと言える。天野先生は戦後旧制一高の校長となり、また中央教育審議会会長をされ、また吉田内閣の文部大臣を1950年から1952年までされた。天野文部大臣の時代に纏められた「日本における教育改革の進展」(1950年8月)の中に「教育改革の達成、日本教育の完全な民主化こそは、われわれの愛する祖国を、前近代的迷妄による過誤と惨苦と汚辱から再生せしめ、国際社会の一員としての名誉ある席を許されうるための、唯一絶対の道であることを切実に体験している」とある。これは「アメリカ教育使節団」への報告のなかのものである。天野文部大臣はこの中で「日本の教育は根本的、革命的な改造を遂げ、徹底的な自己改革を行ってきた」と言っておられるが、現実にはアメリカ教育使節団のすぐれた指導と手引きに依拠したものである。教育は日本人自身の手で解放されるまでは解放されえないのだ。わたしは敗戦の日を私自身の解

放の時と感じ、あの天皇の敗戦のニュースの後、部隊が野外の広場に集まって、作り上げられた物々しい手続きの後に軍旗を燃やしたときに、うわべは神妙な顔をしながら、心底から沸き起こってくる喜びをかみしめたのである。

敗戦後の歴史を書くつもりはないし、戦後の最も貧しく、また厳しい食糧事情のことは思い出したくもない。一市民として感じたことは、朝鮮戦争の頃から食糧事情がよくなり始めたことである。戦争が経済を活性化させることを確かに感じたが、後で分かってきたことは、1950年の朝鮮戦争の勃発でアメリカの対日政策が激変したということである。戦争放棄条項を盛り込んだ日本国憲法がアメリカには邪魔になり始めたのだ。軍隊を持たぬとした日本に警察予備隊、保安隊、やがて自衛隊が生まれるのである。同時にアメリカ主導で戦後に進められてきた革命的とも言える教育改革に対して、再改革の流れが逆流し始め、天野文相はそれを反革命を目指すものと指摘したと言われている。戦後の教育改革の核心をなすものは、『国家の独占』から教育を開放し、これを人民の手に渡すことであった。戦後の日本人民は連合軍によって主権の座を恵与されたのであるが、人民には殆どその意識はなかった。明治国家が作り上げた国民には、近代ヨーロッパに見られるような市民意識は育つべくもなかった。アメリカの指導によって教育を国家の独占から解放して人民に手渡す作業は、実際には従来の中行政官庁の手に託するしかなかった。ところが文部省には戦前・戦中の罪業に対する反省も懺悔もなく、民主主義は掛け声ばかりで、民族の自己解放、市民への自覚を促す思想も未熟なものであった。天野文部大臣のような教育の近代化と民主化を自覚的に持った指導層は余りにも少数者であった。朝鮮戦争を契機にしてアメリカ教育使節団の姿も消えた。教育は再び国家の手に戻ってしまったのである。自由と解放の希望に燃えた戦後の新しい教育革命が挫折しただけでなく、朝鮮戦争という、またしても戦争の影響下に、終戦後春風のように日本の教育世界に吹いたそよ風は、またたくまに異常な成立過程を経て、嘗ての犯罪者である文部省の手に渡されてしまったのである。痛恨の極みという他ないが、先に述べたように、日本には民主主義も育っていなかったし、市民も生まれていなかったのであるから、この先は国家と文部省の思うがままになった。

わたしが次に出会ったのは東北大学の林竹二先生である。詳しく話すつもりはないが京都にも林竹二先生を囲むグループがあり、わたしも京大の四番教室で先生の講演会を開き、また宮城教育大学の学長の時代に一緒に活動していた演劇人竹内敏晴さんの

ワークショップにも参加した。またこれらの活動を通して極僅かでも人間解放の教師と教育の担い手があることを感じている。しかし日本の教育はまだ国家の手に牛耳られたままだ。

日本の教育が何処で決定的な間違いを犯したかと問うなら、幾つかのポイントが指摘されるであろうが、わたしの理解では、池田勇人と言う1960年以降の日本の教育を曲げた元凶のことを語らねばならない。彼は大蔵次官などをした大蔵官僚で、一方で『所得倍増』と言いながら『貧乏人は麦を食え』と言い、首相になると経済審議会に所得倍増を目的とする経済成長を諮問し、この審議会の答申の中に『人的能力の向上と科学技術の振興』とあるのを受けて、中央教育審議会に『人材の育成』を課題として、経済優先の路線で教育のあり方を諮問した。教育審議会は、この経済発展主導、能力優先で日本の教育を展開したので、またたくまに日本の教育は荒廃しはじめ。1960年後半から1970年にかけて能力を優先した教育が支配的になる。教育現場における競争が激しくなり、学力テスト、共通一次テストに続いて教育審議会が作り出した偏差値教育に教師も子供たちも組み込まれ、義務教育としての学校教育は予備校化し、親も教師もこれに巻き込まれ、有名大学を頂点にした学校の序列化が確立、この激しい流れに教師始め親も子も振り回されることになった。義務教育の場においても、いじめや、登校拒否が問題となり、教育の現場が乱れ始めた。

「どこかがおかしい」「何かが間違っている」と人々は感じはじめ、とくに若者の感性は敏感に問題を捉えて、1960年代後半、特に1968年には世界中の大学生が、産学協同、政財界の癒着、大学と企業と政治における腐敗と偽善性に対する怒りを現し、体制批判の大学闘争が蔓延する。大学紛争という言葉が一般化した。このとき問題を共有するべく学生と対話することができた大学人がどれほどいたであろうか。ある大学教師は自らの研究室を空にして現場を離れ、大学近くの住居を離れた連中もいた。とにかく大学紛争は、国家の手で警察機動隊の暴力を用いて押さえ込まれた。1969年の国会で「大学の運営に関する臨時措置法案」をめぐって大学の自治を巡って長時間の喧々諤々があったが、先に論じたように、日本の教育は戦後の教育改革の機会を逸し、池田時代には財界、産業界に学校教育が売り渡され、今や終末の破局への道を速度を上げて暴走しているのが現実である。死に至る日本の教育に、再生と解放への道を開くのは誰か。国家や文部省に期待することはできないのである。

アインシュタインと山宣

日本の不安と科学百年 法橋 登

21世紀の不安はニューヨークで起こった9・11テロから始まったが、百年前の日本にはどんな不安と緊張があったか。年表をみると、民権・人権思想の広まり(福沢諭吉・通俗民権論1978年、中江兆民・民約訳解1982年、天賦人権論・馬場辰猪1983年)と国権の確立(憲法発布1989年、第一回帝国議会開催1890年)を背景に日本が英米独仏との不平等条約改正によって世界の列強の仲間入りしたのが1899年、ロシアの南下政策を視野に入れた日英同盟の調印が1902年、英国対露仏の代理戦争といわれた日露開戦が1904年、第一次世界大戦の開始が1914年、と、戦争の半世紀とよばれた20世紀前半が予兆されている。その一方で、北里柴三郎による破傷風血清療法の見出1890年、志賀潔による赤痢菌の見出1897年、高峰譲吉によるタカジアスターゼ創製1909年、鈴木梅太郎によるオリザニン創製1910年、野口英世の梅毒スピロヘータの純粋培養1911年、といった世界的な業績が短期間に相次いで現れた。英国の植民地統治時代に世界に拡散したベンガルや雲南の風土病であるコレラやチフスを運ぶ入航船の検疫権を日本人の手に取り戻し、不平等条約改正の追い風にしたい明治政府にとって、パスツール(～1895年)やコッホ{～1910年}によって開かれた細菌学や免疫学の分野で欧米に追いつくことは急務だった。日米開戦(1945年)は、近代国家の安全保障を後背地に求めたい両国の「拡大された自衛権」の衝突だった。

科学・社会思想としてのダーウィン進化論は1888年にモールスによって日本に紹介されている。物理学では、アインシュタインによる相対性理論と光量子説の発表が1905年と1906年、1926年には100年続いたニュートンの古典力学に代わる量子力学が誕生し、IT技術を含む今日の先端科学技術の基盤があたえられた。湯川中間子論が発表されたのは、それから10年後の1936年である。二次大戦後、日本、中国、台湾、パキスタンなど、東洋からそれぞれの国で始めてのノーベル賞受賞者が基礎科学の分野で現れ、科学史の舞台が西洋から東洋にひろがるとともに、環太平洋経済圏

と欧露ユーラシア圏などの間に新しい21世紀の緊張が生まれた。

2. カナダでの山宣とキリスト教社会主義

私の父は中学生のとき、不作が続いた鳥取の山村を出てカナダに渡った。大陸横断鉄道のボーイなどしながら入ったバンクーバーのハイスクールでは遠縁をたよって京都から先にきていた山本宣治（山宣）と同じクラスになった。私が1961～2年の間IAEAフェローとして配属されたオンタリオ州の原子力研究所に通っていた頃、通勤バスでの行き帰りに横断鉄道を横切ったが、通過列車は上下とも一日一本で、踏切には「鹿横断中」という標識が立っていた。楓とならぶカナダのシンボル大角鹿（ムース）も列車も実際に見たカナダ人は少ない、というジョークらしい。山宣は州立のハイスクールの2年から始まる進学コースへの進級試験に合格していたが、新渡戸稲造が属していたキリスト教社会主義者の多いユニテリアン教会に通ううちに、幸徳秋水の大逆事件裁判に抗議する米国社会主義者による反日運動を英字新聞で知り、「世界思想とユニテリアン主義」という英文小冊子を翻訳し、9回にわたってバンクーバーの邦字紙に連載した。活字になった山宣の最初の文章である。ここで山宣は、進化論や細菌学、免疫学を含む生物学や近代科学一般がキリスト教に与えた影響を論じ、科学的真理に開かれたユニテリアン教会を支持している。

人生生物学と自由大学

父は1922年にバンクーバーの大学を出て中国に渡り、上海事変で東亜同文書院が襲撃を受けるまでこの書院の先生をしていたが、10年早く帰国した山宣は、同志社普通科、旧三高、東大生物学科を卒業後京大生物学科大学院に籍をおきながら医学部の生物学講師になった。そこで生殖細胞の発生機構やイモリの皮膚の斑紋形成機構など生物学の基礎研究をするかたわら、同志社予科で「人生生物学」の講義をした。山宣は、人間の生物学的現象を生物の最小単位である細胞や微生物の働きに結びつける従来の生物学を求心的生物学または死物学とよび、人間の生殖現象から個人の生死、不安の問題から社会現象に視点をひろげる人生生物学を遠心的生物学とよんだ。山宣は権威に安住して行動様式を変化させない日本の正統的生物学者や一般知識階級に失望するようになり、農民の学習機関と

して長野県上田で誕生した信濃自由大学の趣旨に共鳴し、翌1923年に新潟県北魚沼郡で開校した魚沼自由大学の講師になる。他の講師は京大助教授恒藤恭と土田杏村と山口正太郎（経済学）の三人で、受講者は県主催の講習会に反対した教師の一団だった。前年の1922年11月1日に開講した最初の自由大学 信濃自由大学は恒藤恭の法律哲学の講義で始まった。哲学概論を担当した佐渡出身の土田杏村は新潟師範、東京高師から京大生物学科大学院を出て哲学、文化論を専門に文壇で活躍した。生物学者としては土田は「生物哲学」という本も書いている。山宣は1924年に開校した京都労農学校の校長になり、生物学の講義をしながら、産児制限・無産運動家として当時のプロレタリア運動に参加したが、1928年に自身が白色テロと呼んだ勢力の犠牲になった。死後刊行された「電車の生物学」では、資本主義社会を電車にたとえ、有産階級を座席階級、無産階級を吊り革階級、特権階級をタダ乗り階級とよび、座席階級の合法性を無産階級に説明した。

3. アインシュタインと山宣

アインシュタインは、相対性理論の講演のため改造社の招きで1922年に来日した。山宣は、仙台、仙台、東京で講演したあと京都入りしたアインシュタインと面会している。戦争の自然的条件や既存観念が戦争に及ぼす影響を論じた生理学者ゲオルグ・ニコライの本の日本語版の序文を依頼するためである。第一次世界大戦が始まった1914年にベルリン大学私講師だったニコライは、アインシュタインらと連名で「ヨーロッパ人に訴える書」を発表したが、翌1915年には「人類進化における生物学因子としての戦争」という演題の連続講演を準備していた。講演の直前にニコライは軍医として召集されたが、従軍を拒否してプロシア陸軍に拘束された。講演の草稿は、ニコライの支援者によって国外に持ち出され、独仏語で刊行された。山宣が序文を依頼したのは独語版で、宣治はニコライの承諾をもらって和訳をすでに終えていた。この日本語版は京都の内外出版社から刊行されている。山宣とアインシュタインとの対談では、日独両国が平和と自由を取り戻すには知識階級の意識改革が先か（アインシュタイン）、無産階級との連帯が先か（宣治）、でふたりの意見は分かれた。

参考文献

「山本宣治」(佐々木敏二、汐文社1974年)
「アインシュタインショック」(金子務 岩波現代文庫、2005年)

西欧の絵本色々17

昔の子どもの遊び - 少女編

私の絵本漂流記

高橋理喜男

前号でアメリカの少年を対象に『昔の子どもの遊び - 少年編』を紹介した。もちろん少女の遊びにも触れているが、少し片手落ちの感があった。そこで、少年編から5年遅れて1887年(明治20年)に出版された姉妹編の少女の遊びも披露したい。

少女の遊び方では、室内での手芸遊びが多いのは当然かも知れない。しかし、野外での活発なリクリエーション的活動も視野に入れて、行き届いたハンドブックにまとめられていることにまず注目しておきたい。

第3章のウォーキングクラブをちょっと覗いてみよう。このクラブによって心身の活力が増進され、社交性が向上されると、その効能をあげている。とくに、ウォーキングを通して自然との親密な交流が成立し、楽しい驚きが与えられ、秘密のヴェールが開かれる。クラブとしては、もっとも堅苦しくない社交クラブの一つである。その組織の適性規模は、それぞれのウォークに12名から14名の参加者が見込まれるだけのメンバーが確保できればよい。出掛ける前に、予め投票によってルートを決めておくのがよい。初めてのウォークは長距離ではなく、往復5km以内が望ましく、次第に距離を伸ばしていく。しかし、疲れを感じない距離は16kmまでであることを知っておくとよいと、きめの細かな助言をしてくれる。

少女たちに限らないが、もう一つの楽しい野遊びにピクニックがある。中でもアメリカ的なのは、バーグー(burgoo)と称して、肉や野菜のシチューを出すピクニックと、もう一つはトウモロコシ焼きである。前者は、本書が出版される30年か40年前、ケンタッキーの人々が夏の休暇を祝って始めたと言われる。各自が持ち寄った材料からシチューが作られた。狩り好きの人は、鳥やリスやウサギを求めて森へ入っていった。魚を釣ってくる人もあれば、ブタ肉、野菜、スパイスを持参する人もあった。出来上がると、貝のスープで食べて食べた。このピクニックの常連であった古老たち、これがもっとも美味しい祝宴であった、口を揃えて語った。本書には15~20人のレシピがついている。

トウモロコシ焼きの方はどうなんだろう。はじめに、一人につき1本の串を用意しよう。長さ2mほどで、先を尖らしておく。タキ火を囲んで、午後3時頃からパーティが開始される。めいめい串に刺したコーンを火にかざして焼き上げ、皆で塩とバターをつけて食べる。もちろん、パンやコーヒーも用意されている。その他に、ヨーロッパに伝統的な5月祭を継承した遊びや、秋のナップ拾いパーティ等がある。

全体として概観してみると、少年編も少女編も、当時の中産階級の子弟を対象としているように思われる。また、日本のお花やお茶と同じように、少女編では絵画や彫刻、様々の手芸から、家具や窓辺の装飾等に至るまで、一種の「おけいごと」的項目を含んでいて、その点、少年の遊びと大きく異にしている。

キリスト教と平和(続き)

花岡永子

2) キリスト教における自覚を介した平和と徳

組織神学者の Paul Tillich(1886~1965)は、彼の著書『組織神学』(1951~63)において、人間における存在(Sein)、実存(Existenz)、生(Leben)に、キリスト教の三位一体論での父(Gott)、子(Christus)、霊(Geist)を対応させて考察している。また、歴史には神の国が対応させられている。また西谷啓治は、プラトンのアイデアの世界やキリスト教の人格的な神は、地上から天上への九十度の転回で現われ、「虚無の深淵」はマイナスの九十度の方向での転回で現われ、「空の立場」は三百六十度(ないしは百八十度)の回転で現われると述べている(2)。更に、フィオーレのヨアキム(Joachim de Fiore, 1135頃~1202)は、終末論的に、旧約聖書の時代は「父」の時代、新約聖書の時代は「子」の時代で42世代続き、1260年には「聖霊」の時代が始まると理解している。西谷やヨアキムの例に見られるように、個のレベルでのみならず、人類の歴史のレベルにおいても、父の時代、キリストの時代そして霊の時代と理解されることが可能である。無論、真の自己に一瞬なりとも目覚め、覚すれば、存在(自我)、実存、生(虚無的個)は、真の自己の内で、愛(アガペー)に生かされ、支えられて、父、キリスト、霊にそれぞれ対応し、それぞれの人間の個の自覚の段階は臨機応変にそれぞれにその段階の本分を発揮する。真の自己に一瞬でも目覚め、「天地同根、万物一体」(『碧巖集』第40則)であり、常に同時に「天上天下唯我独尊」(『碧巖集』第57則)であるという真の自己のあり方に自覚的に生きることを目指し始めれば、自己の自覚の裏面である世界の自覚からの愛(アガペー)や慈悲

の支えによって自我、実存、生（虚無的個）という人間の個のありかたは、それぞれ人間の個のその段階での本分や本領を、時と場合に応じて、発揮する。

しかし、その自己が未だ一瞬も自覚的に経験されない間は、人間の個は、自我、実存、生（虚無的個）の段階を発展的に辿る。そして、そこでの人間の歴史は未だ、時と永遠が瞬時瞬時に交錯するような非連続的で、水平的であると同時に垂直的な、いわば点的な時の集合であるような非連続の連続の歴史として進むことがない。そこでの歴史は、いわば連続的で、年代記的な歴史でしかない。この歴史は、将来的終末論的に進行する歴史となる。つまり、自我に対応する父が中心となって時代が動く時代、実存に対応するキリストが主調となる時代そして生（虚無的個）に対応する霊が主調となる時代が、例えば、フィオーレのヨアキムが考えているように、歴史の中でも順次繰り上げられ、進められることになる。しかし注意すべきは、個においても世界の歴史においても、人間の個と世界の歴史との両者の自覚のレベルがどこに存するかによって、そこで露わとなる徳は相違することである。というのも、「真の自己」の自覚段階での徳は、愛（アガペー）や慈悲によって世界の側から裏打ちされるからである。

そこで、世界の歴史上においても人間の個のレベルにおいても共に妥当する人間の自覚のあり方と、そこに露わとなっている人間の個の徳のあり方を考察したい。その際に、個と世界とは相互に限定し合う領域として、個のみならず世界も問題の考察の中に入っていくことに注意が払われなければならない。

「自我」の自覚段階での平和と徳

先に述べた 12 世紀のフィオーレのヨアキムでは、神の時代は旧約聖書の時代と理解されているが、21 世紀の現代から振り返ってみると、キリスト教の「父」なる神に対応する人間における自我は、ヘーゲル（1770~1831）に至るまでの西欧の伝統的な主流の哲学の核心となっていた。「自我」は、人間の個の自覚で考えると、自らを世界の中心として、自我以外的一切を対象化、客観化、抽象化、合理化、実体化、記号化して理解しようとする。そして、ヘーゲルに至る迄の伝統的、正統的キリスト教が実現しようとした平和は、キリスト教の絶対化の基礎の上に成り立っていたと言える。

しかしながら、ヘーゲルに至る迄の、西欧の伝統的な正統的キリスト教の理解の中には、カントの『永遠平和のために』（1795）においてのように、神の「摂理」ではなく、「自然」という語を用いて平和を考察しようとしている例もある(3)。しかし、カントのこの立場は、表面的には諸宗教間の拮抗から解放された

理性の立場での平和論に見えるが、根源的にはキリスト教のいわば絶対化の上に成り立っている。また、ヘーゲル以降現代に到るまでにも、キリスト教的な自我だけが蔓延り、キリスト教の単なる絶対化に基づいた平和論も少なくない。例えば、イラクに対するアメリカの現大統領のブッシュの平和論もこの類いに属すると言えよう。

ところで、このようなキリスト教の絶対化の基礎の上に「自我」を核心とした平和論での、人間の個（自我）における自覚の一表現としての徳は、古代ギリシア哲学においてと同様、節制、勇気、知恵、そしてそれらを包摂する正義であると言っても誤りではないであろう。何故なら、両者における平和の内実は、生まれながらの理性の基礎の上に生きる自我の唱える平和でしかあり得ないからであり、個においては相対有を絶対視する唯物論的思考法は避けられているとは言え、キリスト教を信仰していると言っても、自我中心であり、思考のパラダイムは絶対有としての神が土台となっていることに変わりはないからである。更に、ここでの世界はキリスト教の立場と自我の立場とを同定した上での自我が拡大された世界でしかあり得ず、自我が世界の側から限定されることは容易ではない。

「実存」の自覚段階での平和と徳

先にも述べたように、生物兵器や核兵器が存在する現代では戦争は許されない。しかし、それにも拘らず、アメリカとイラクとの戦争後に再度大戦争が生じ得ないという保証は全くない。そのような状況の中での、自我から実存へと開かれた自覚の段階での平和は、例えば、プロテスタントの Dietrich Bonhoeffer(1906-1945) が、ドイツのナチ党のユダヤ民族絶滅の行為に対して試みた闘争に典型的に見られる。大学の私講師であり、教会の牧師であった彼は、周知のように第二次世界大戦で、自国の大統領であったヒトラー（A. Hitler）の暗殺計画に参画したが、その計画が発覚して自らが処刑されてしまった。平和主義に生きようとする彼の实存に典型的に見られるように、この自覚段階では、人間の個は自らの信仰する神の信者たちに対してだけでなく、他の宗教（この例では、ユダヤ教）の人々に対しても心は開かれている。平和の実現に向けて、他宗教の信者たちの救済に自らの命を捧げる覚悟のできた平和論がボンヘッファーでは展開されている。しかしながら、彼の思想には、キリスト教の神が唯一の神であり、他宗教は成熟したキリスト教へと進展して行く途上の宗教と見なされる側面が潜んでいると言えよう。彼は、新訳聖書の「山上の垂訓」（Mt. 5-7）をいわば成熟した唯一の宗教としてのキリスト教の中心に据え、山上の垂訓によってヒトラーの「魔術と妖怪」による民族差別をも解決し得ると考えていた。

しかし、ボンヘッファーの思考の枠組みである思考のパラダイムや思考の場は、絶対有と相対無であったと理解される。つまり、彼におけるキリスト教の神は絶対有の神であり、彼における不安は絶対無から発するアガペーとしての愛に支えられた不安であると言うよりは、まだ相対無に起因する「不安の無」であったと理解され得る。従って、理論的にも実践的にも実存の立場での平和論は、たとえそこで「自我」の大死が実現されていようとも、あるいはある一宗教への殉教の死や他宗教への通底性が見出されていようとも、「真の自己の自覚」には未だ目覚めていないと理解されるのである。

ところで、人間の個が、芸道や宗教的修行の実践等の真只中でたとえ一瞬であれ、「真の自己」に目覚めるならば、人間の個においては、自我、実存、生（虚無的個）は、自らを含めた「真の自己」である万物の根底から発してくる神的で、惜しみなく与える愛としてのアガペーや慈悲によって裏打ちされて、それぞれに独特の、即ちアガペーや慈悲に裏打ちされた自我、実存、生（虚無的個）が渾然一体となって、臨機応変にそれらの内のいずれかの自覚のあり方の一つあるいは幾つかが主調となって働くと考えられる。しかし真の自覚が、つまり自己の自覚と世界の自覚が一である真の自覚が覚る以前は、自我、実存、生（虚無的個）には、未だ「世界の自覚」からのアガペーや慈悲の裏打ちによる支援は開かれていない。従って、それぞれの自覚段階での平和論も、それぞれの思考の枠組みとしてのパラダイムである相対有、相対無、絶対有、虚無のパラダイムの枠から解放されて自由となることができない。

そこで、キリスト教における実存の自覚段階での平和も徳も、実存の自覚段階での思考のパラダイムとなっている絶対有や相対無のパラダイムの枠組みを超えることは困難である。ここでは、理論的にも実践的にも、絶対有に対しての殉教の死を遂げるか、相対無に対する不安や絶望や退屈等々に苛まされて、真の自己や真の世界からの逃避あるいは真の自己や世界に対する反抗に生きることになり、例えばボンヘッファーやM. ブーバーの提唱する対話の場は放棄され、究極的には平和とは無縁の生を生きることになる。またこゝでの徳は、始めは対話が掲げられる。が、最終的には、ボンヘッファーが生きようとしたヒトラーやその関係者との対話の場合のように、対話の不可能性に力尽きて、暗殺計画に加担し、自ら死して行くことになる。この自覚段階での徳は、自我否定、自我の死の徳ではあるが、この徳は、更にその死を否定して真の自己へと転換させることができない。従って単なる自己犠牲に終わってしまう危険性をこの徳は孕んでいる。また、真の自己や世界からの逃避あるいはそれらへの反抗に

は、この世の無常性に気づく徳は認められても、「平和の実現」には積極的に貢献できない。というのも、宗教とは、森羅万象に通底する真の自己が自覚され、その結果、真の自己の自覚と世界の自覚が一に生きられることであると理解されるからである。

京都フォーラム 矢崎勝彦様

太陽エネルギーの普及を推進することを考えて居りますが、いざ実行の段階になりますといささか力不足でこれからどうしたらよいか適当な方策が立たず苦労しております。

エネルギー問題・環境問題は 21 世紀人類の重要な課題であり、京都フォーラムでもその方面に大変尽力されておられるので、この際相談に乗って頂けるのではないかと考え、この手紙を差し上げようと思いついた次第です。

同封いたしますのは、編集中の「教育通信 58 号」の冒頭の 2 ページに載せた「太陽エネルギーのすすめ（二）」と、国立天文台ヘナイジェリアから来ているシガロさんと大学院の斎藤さんと 3 人で書いた“The Energy Development Strategies in the 21st Century” という International Journal of Energy Research へ投稿中の論文、および、数日前特許の申請をした「固定全天集光対流防止型太陽エネルギー熱水・発電装置」の申請書コピーの三つの書類です。

最初の「太陽エネルギーのすすめ」は、最近話題になっている人工光合成は入っていませんが、太陽エネルギーをどう利用すべきかの一般論です。レスター・ブラウンなどと違う点は、太陽物理学などの原理がよく考慮されている点です。第 2 の英文の論文は太陽エネルギーに限らずエネルギー問題の戦略を述べたものですが、独立ナイジェリアの意気を欧米特に旧宗主国イギリスの連中に一泡吹かせたいいたずらと次世代の人に一緒に論文を書く手伝いをさせて秘伝を伝授するのがねらいです。発展途上国の人と協力しない限り、どんなエネルギー・環境の戦略も成功しないと考えています。第三の特許申請の目的は、一つには単なる空論でなく実用的なものである（本当か？）と宣伝をして人に信用させるためと、この原理を別の人の特許に使い独占してしまうことを防ぐ（例えば石油企業がこの装置を使えなくするために特許をとり、石油利権の価値を保とうとするのを防ぐ）ためです。発展途上国の人を含めすべての人が手軽に制作できるようにしたいわけです。

ところで、相談に乗っていただきたいことは、まだ

特許が取れるかどうか分かりませんが、かりに取れたとしてその後始末をどうするかです。私は、としですし、こういう実際的な仕事は皆目駄目で、甥が手伝ってもいいように言うてはいますが、全人類的な問題だけにもっとしっかりした機関が特許の運営・管理などをして頂きたいわけです。また、特許が取れるかどうかに関係なく、太陽エネルギーの普及を推進する役割をお願いしたいと思います。というわけで、京都フォーラムがそれらに関係して下さるかどうか、それにはどういう形がありうるか、矢崎さんのご意見をお聞きしたいと存じます。必要ならいつでも説明に参上いたしますが、まづは書面にてお伺い申し上げます。

6・2 海野和三郎 拝
〒 180-0003、武蔵野市吉祥寺南町 4-15-12、
unno@parkcity.ne.jp

新著自己紹介

『ビジュアル図解： 相対性理論』

菅野礼司・市瀬和義著（PHP研究所）

アインシュタインが1905年に発表した3つの論文、相対性理論、光量子説、およびブラウン運動の統計力学から、今年はずっと100年になります。これらの論文は、いずれもその後の物理学の進む方向を決めた大論文でした。その偉業を讃えて、今年「世界物理年」とし、様々な催し物が計画されています。アインシュタインにかかわる本も多く出版されるはずですが、私たちは、物理を専門としない人たちにも、相対性理論を分かり易く解説する本を書きましたので、この欄をお借りしてお知らせします。「まえがき」からの抜粋で、出版の目的と趣旨の紹介に替えます。

これまで「相対性理論」を解説した本はたくさんあります。しかし、その考えがどのような過程を経て出てきたのか、その背景にあったものは何かをじっくり考えさせる本は割合少ないと思います。そこで本書は、科学史の流れの中で、「相対性理論」の意味を学ぼうと企画しました。

相対性理論は、アインシュタインという1人の天才が、ある日突然、編み出した理論ではありません。人類が長い歴史の中で、自然の謎解きに真摯に取り組むことで見出した理論の積み重ねの上に集大成された成果の1つなのです。本書では、相対性理論がどのようにして生まれたのか、その歴史的背景と到達の道筋をできるだけ取り入れ、また相対性理論を正しく理解するために理論の本筋をはずさないような構成に努めました。

そのために、数式を使って解説したところも含まれています。科学を正確に表現し、また正しく理解するためには、ある程度の数式は必要です。数式を用いずに言葉で表現すると、かえってわかり難くなったり、誤った理解に陥ることも多くあります。数式は科学を正確・厳密に記述するのに適した1つの言葉なのです。数式に馴れない人にとっては、最初は少し取りつきにくいかも知れませんが、最初は眺めるようにでも読んでみてください。数式アレルギーの人でも、少し辛抱して数式を読んでいけば慣れてくるものです。辛抱のあとには、必ず喜びが待っています。

感動の「智の芸術作品」

相対性理論には、先に挙げた「特殊相対性理論」と「一般相対性理論」の2つがあり、整った形式をしています。いずれも論理がきれいに整っていて、その理論形式は美しい体系をしています。「智の芸術作品」ともいえる美しさです。その美しさを観賞する目は知的好奇心であり、その心は自然観です。類い稀なこの「芸術作品」は、きっとみなさんの感性に訴えるものがあるはずですが、そして、相対性理論の世界に浸ることで、自然の仕組みの意外性に驚き、その奥深さを知る喜びと感動・ロマンを味わえるはずですが。

相対性理論と日本人、そして教育

日本人は知的好奇心が比較的強い民族です。そのせいか、「相対性理論」は、以前から科学者以外の一般の人にとっても、強い興味の対象になっていました。しかし最近、残念なことに日本人の科学的な好奇心が弱くなってきたように思われます。「若者の理科離れ」もその現れの1つです。なぜなのか、その理由はたくさん考えられます。なかでも、知的好奇心と自ら考える力を育てない今の教育の欠陥と、物があふれ、しかも多様化が進んだ「思考停止社会」にあるのではないかと筆者は考えています。

日本における今の学校教育は、多くの知識をばらばらに詰め込む「縦割り教育」です。理科教育は問題を速く、うまく解くための知識詰め込み型であり、途中の過程よりも結果の答えに関心を持つブラックボックス的方法です。現象に対して「なぜ」と問う習慣や、筋道を追って科学的に物事を考える機会が失われています。驚いたことに、物理を暗記科目と思っている生徒が増えているそうです。これでは、理論の道筋を理解するためにじっくり考えたり、自然について疑問をもって検証しようとする人は育ちません。また、自然の仕組みについての謎解きという物理学本来の面白さを味わうこともできません。

この機会に、ぜひ現代科学について学んでみませんか。中でも相対性理論は意外性に富んでいて興味深い対象になるはずですが、その整った理論体系は、論理の筋道を順に辿ることで、科学の本当の姿を理解するには打ってつけだと思います。

（編集 菅野）